

インフルエンザ

- ① インフルエンザウイルスを病原とする気道感染症ですが、「一般のかぜ症候群」とは分けて考えるべき「重くなりやすい疾患」である。
- ② 感染してから1～3日間後に、発熱（通常38℃以上の高熱）、頭痛、全身倦怠感、筋肉痛・関節痛などが突然現れ、咳、鼻汁などの上気道炎症状がこれに続き、約1週間の経過で軽快するが、「かぜ」に比べて全身症状が強い。
- ③ 高齢者や、呼吸器、循環器、腎臓に慢性疾患を持つ患者、糖尿病、免疫機能が低下している方は、呼吸器に二次的な細菌感染症（肺炎）を起こしやすくなります。
- ④ 小児では中耳炎の合併、熱性痙攣や気管支喘息を誘発することもある。
- ⑤ 近年、小児において、急激に悪化する急性脳症が増加することが明らかとなっている。毎年50～200人のインフルエンザ脳症患者が報告されており、その約10～30%が死亡している。原因は不明である。現在も詳細な調査が続けられている。

インフルエンザにかかったと思ったら、早めに医療機関を受診しましょう。

⑥ 治療としては、下記の抗インフルエンザウイルス薬があります。

- ・ オセルタミビルリン酸塩（商品名：タミフル）内服薬
- ・ ザナミビル水和物（商品名：リレンザ）吸入薬
- ・ ラニナミビルオクタン酸エステル水和物（商品名：イナビル）吸入薬
- ・ ペラミビル水和物（商品名：ラピアクタ）点滴薬

【注意】 その効果は症状が出始めてからの時間や病状で異なります。

発症から48時間以内に開始すると、発熱期間は通常1～2日短縮され、鼻やのどからのウイルス排出量も減少します。症状が出てから2日（48時間）以降に服用を開始した場合、十分な効果は期待できません。

効果的な使用のためには用法、用量、期間（服用する日数）を守ることが重要です。

⑦ 予防ポイント

流行期に人込みを避けること、それが避けられない場合などにはマスクを着用すること、外出後のうがいや手洗い励行すること。

⑧現在わが国で用いられているインフルエンザワクチンは、不活化HAワクチンで、感染や発症そのものを完全には防御できないが、重症化や合併症の発生を予防する効果は証明されています。現行ワクチンの安全性はきわめて高いと評価されている。

⑨高齢者はワクチンを接種すると、接種しなかった場合に比べて、死亡の危険を1/5に、入院の危険を約1/3～1/2にまで減少させることが期待できる。

⑩目黒区の小中学校、保育園では診断がついて、発症後5日を経過し、かつ、解熱した後2日（幼稚園児については3日）を経過するまで（発症した日、解熱した日の翌日を1日目とする）。登校登園を控えることになっています。